

文芸同人誌
勢陽

—記念特集—

第30号

目次

表紙画／宇治橋
文中挿絵

榊原匡章

特集テーマ 心のふるさと・伊勢

随想 お伊勢まいりの記憶と新元号の時代 森本正昭 ————— 2

随想 離宮院―神宮群行の夢 山神徳子 ————— 11

散文詩・「伊勢神宮」 随想・「豊受神宮」 榊原匡章 ————— 16

随想 「宇治」「山田」「伊勢」 江崎淑子 ————— 20

随想 閻魔大王がくれた臍 西村壽郎 ————— 22

随想 伊勢本街道 玉城町の善楽寺 水田まり ————— 27

自由テーマ

小説 おもしろ小説講座 森本正昭 — 32

ある女の生きかた (前編) 野上 淳 — 45

時代小説
うのと駿之介 水田まり — 77

随想 二見浦—青春の声 山神徳子 — 127

病院の同輩 榊原匡章 — 145

花めぐり 江崎淑子 — 147

島崎藤村 小説『破戒』紀行 釈 恵照 — 154

小説 スイカ検定 櫛谷文彦 — 162

勢州兵乱記
齋宮徳政兵乱のこと (後編) 松田實鞠 — 168

編集後記 森本 正昭 — 194

会員名簿 — 195

NET会員の作品 — 196

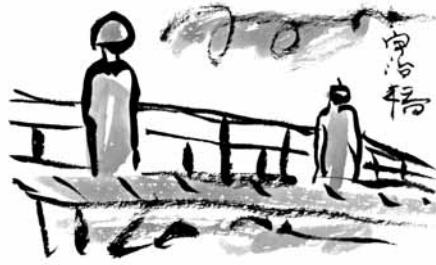
特集テーマ
—心のふるさと・伊勢—

―心のふるさと・伊勢―

お伊勢まいりの記憶と

新元号の時代

森 本 正 昭



大詔奉戴日のこと

私が小国民（太平洋戦争下の年少の国民）だったころ、伊勢神宮参拝をすることで大変気持ちを高揚させる行事

があった。

戦時下の東条内閣は太平洋戦争開戦の12月8日を記念して、毎月8日を大詔奉戴日と定め、国旗掲揚、君が代斉唱、宮城遙拝などを国民に強要したのである。私の通っていた小学校は、すぐ近くに伊勢神宮の外宮が位置していたので、全校児童は長い行列を連ねて神宮におまいりをするようになった。まず校庭にある奉安殿（天皇陛下と皇后陛下のご真影が納められていた）に最敬礼した後、外宮に向かう。戦勝祈念をするためである。

事前に先生からいろんな注意があった。道中は軍隊のように規律正しく行進していく。そのとき友達同士でお喋りをしたりふざけたりすることは厳禁。これは遠足ではない。わが国が戦争に勝つよう神宮の神様をお願いをするのだ。いいか絶対にふざけたり笑ったりしてはならんぞと先生は怖い顔をして児童を戒めたのである。外宮の神域に入ると、これを厳重に守らねばならない雰囲気だった。近隣の他の小学校の児童たちも何か神秘的な面持ちで行列しているのをお互いに内心におかしさが漂うのを感じた。全員で小さい手を顔の前に合わせてお祈りする。かならず効果があると信じましょうと先生は言った。日本は当時、大日本帝国と呼ばれていて、世界の主要国

と戦争状態にあった。戦争は勝たねばならないのだった。

この頃、昭和天皇は東京から伊勢に赴いて親祭（天皇みずから神宮に参拝すること）を行っている。1回目は昭和15年の紀元2600年のお祝いの時、全国民黙祷の時間を2月11日午前11時12分、この時刻に合わせて昭和天皇と国民が一斉に黙祷したという。私は幼すぎてその記憶はない。昭和17年12月にも昭和天皇が戦勝祈願のために再び伊勢神宮で親祭が行われた。3回目は敗戦後であった。

武澤秀一「伊勢神宮と天皇の謎」によると、天皇みずから伊勢神宮に参拝するのはタブーとされ、持統天皇（在位690～697）以来の画期的な出来事だという。持統天皇は女帝で古代の王政の体系を形作るためとされる。その後、千年余の空白を経て明治天皇は万世一系の理念を現代に体现するために伊勢神宮参拝をしておられる。

昭和天皇が伊勢神宮での戦勝祈願をなされること、これは日本が大変なことになっているのだと思った。小国民でもこの重大さを感じざるを得なかった。大詔奉戴日の行事はこのような背景によって戦時色の強いものであったが、命じられるままに行列に参加していたのである。

やがて開戦から2年ほど経過すると、米軍の艦載機が上空に飛来する事態となり、小学生が行列を連ねて行進することは危険だということで、この行事は行われなくなった。神宮まで行かずに、校庭から東の方に向かって宮城遙拝を行うことになった。上級生は教育勅語の暗唱をさせられていた。暑い日差しで倒れる児童が何人もいた。日射病、今日という熱中症である。倒れる児童は栄養不良のせいでもあった。

宇治山田市（伊勢市の旧名称）が夜間空襲に遭った昭和20年7月28日から翌日未明にかけて、伊勢神宮も被害に遭っている。外宮宮域には多量の焼夷弾が投下された。罹災後にトラック3台分の殻が回収された。しかし御正宮や各殿舎に被害がなかったのは神異と申すほかはないと書かれた記録がある。内宮は安泰であった。警備隊員と軍隊が懸命に神殿をお護りしたに違いない。

宮城遙拝、祈りつて何

前述のように全国民が日時を合わせて祈る効果はどれほどのものか。小国民も宮城遙拝を行った。祈りつてどういうことなのだろうか、子供なりに思考を巡らせてみ

た。伊勢に住む私たちにとつて宮城は東の方向にあった。天皇は宮中三殿から皇祖・天照大御神に対して祈る。それは西の方向に向かつていた。そうすると祈り同士がガチンコしないのかなと思つた。祈りの力は電波のようなエネルギーじゃないのかと友人は言つた。伊勢神宮に向かつて大変な高エネルギーが飛び込んでくることにならないか。それを神宮の用材になる樹々が吸収するのと同じか。パワーを吸い込んだが故に巨木が式年遷宮の時に本殿建築に使われるのと違つかという説を友人は唱へた。

神宮の山は檜、杉、椎、楠などに覆われた古代の記憶をとどめる照葉樹の森である。常緑の樹々は陽の光を浴びると葉の表面がまるで緑の金属でもあるかのように照り輝いている。遠くから見ても、樹々の大きさや逞しさが感じられる。

「伊勢神宮の背後にある山々が祈りのパワーを吸収しているのかもしれない。山という字は電波を受信する電波塔の格好しとるやろ。伊勢神宮の背後にある山々なら十分なパワーを受け取れると思うな。祈りだけじゃないよな。先生の言う通りで、一致団結する日本人の力は凄いもんだ。一度あの山に登って確かめてみよう」と私は友

人と誓つた。朝熊山、神路山のどちらかに登ろう。神路山の方は管理された原始林なので、無断で潜入することは禁止されているらしい。神宮職員に見つかつてひどく叱られたことがあり、山のパワーを感じ取るに至らなかつた。なぜ叱られたのが分からなかつた。外宮の背後にある神宮の森は戦中戦後にかけて子ども達の格好の遊び場だつたからである。

それにしても「祈りつてなんやろなあ」と深く考えてみるのだった。神は沈黙を守つていて答えてくれることはなかつた。

戦時下にあつて、国内ではいろんな物や事が統制される中で、遊びの旅行も禁止されていた。いわく「遊樂旅行廃止」となつていたが、神宮参拝だけは奨励されていて、年間800万人もの参拝者を数えたそうである。これだけの人数は江戸時代の「おかげまいり・ええじやないか」を引き継いでいる感があつた。

国民の身命をかけた努力や祈禱にもかかわらず日本は敗戦の悲劇を味わう。その結果、一転して神宮参拝に行く人は激減した。戦後のある日、私は母に連れられて内宮におまいりに行ったことがある。母に戦争に負けても神様には以前と変わらぬお祈りをしなければいけません

と言われた。

戦時下にあつて伊勢神宮には神鷄が参道にもいたし、五十鈴川には多数の錦鯉が優雅に泳いでいたのだが、戦後の食糧難のせいであろう。ほとんど姿を消していた。母はこんなこと許されないわねえと言つて寂しそうな表情をしていた。神様に仕える者の食料に使われたのだから神は沈黙を守っていた。

大学生であつたある日、友人と2人で夜の時間帯に神宮の中に入つていったことがある。入口の守衛さんがコクリコクリと居眠りをしているのをいいことに、参道を進む。高い樹々が繁っているので辺り一体が漆黒の闇に包まれていた。何も見えないのだ。歩いて行く玉砂利の音だけが跳ね返ってくる。闇は人の内面の世界を呼び込むものだ。しばらく行くと星空が見える所に出た。白装束の神官が1人、焚火をしていた。燃える木がパチパチと音を立てて火の粉が舞い上がる。ふうつと古代の世界に引き込まれていくのを感じた。神官と何かお話を交わしたのだがどんな会話をしたのか何も覚えていない。

伊勢神宮は宗教とはいっても仏教、キリスト教、イスラム教などの宗教とは画然とした相違がある。自然崇拜の宗教というべきであろうか。伊勢神宮は太陽神を祭つ

ている。同じ領域に月読宮や月夜見宮があつてロマンティックな雰囲気すらある。

昔々の日本列島の南西部は照葉樹林の森が覆つてたと聞く。それが開発によって著しく減少した。ある程度まとまって残つているのは四国、九州の一部と、本州では伊勢神宮と、紀州の大塔山系だけである(宇江敏勝『森のめぐみ』)。

日本ではあらゆるものに神の存在を認めている。厳しい自然現象には荒ぶる神を祭ることによつてその神々は人間社会に和むこと(なごむ)ができる(風日祈宮、山岳神社、火山神社など)。出征兵士の武運長久を祈るときは、地元と縁の深い神社に地元民が集まつて初々しい若者を戦場に送り出したものである。私が特に好きなのは峠神である。自然と人間の行動が交差する峠に座して、人生の節々に峠を越えていく若者を優しく見守つてくれる神や地藏菩薩がそれである。

おかげまいりと日本人意識

「おかげまいり」の時代には一生に一度はお伊勢まいりをしたというのが庶民の願ひであつた。なぜそうし

たいかというところ、伊勢神宮は福の神で、そこに行けば心願がかなう、農家なら豊作に恵まれるという期待があったからである。伊勢の神領民（神宮の領地の住民）の家には「笑門」と書いた注連縄が1年中飾ってあるのも他の地域からの参詣者には奇異なことであった。「笑う門には福來たる」という幸運にあやかりたいと思われていたようだ。

江戸時代の日本は200余の藩に分かれていた。国と言えは自分の属する藩のことであった。他藩の領地を通るには通行手形が必要であったが、お伊勢まいりだと言えは通行手形を得ることや関所の通過は容易であったという。狭い藩内ではなくて、日本全体を日本の国だという日本人意識が定着したのは「お伊勢さん」の役割が大きかった。国外からは外敵が攻撃的な圧力をかけてくることがあったが、海に囲まれた島国・日本ではその機会は幸いにも少なかった。

「おかげまいり」の人々はひたすら伊勢を目指した。伊勢に行くには江戸から片道15日、大阪から5日、東北や九州からも人々は徒歩旅行をくわだてた。お伊勢まいりだけではなく、帰路に京都、大阪に回り道することも楽しみであった。その費用は相当な負担となった。それ

で「お伊勢講」を利用する人が多かった。旅やおまいりについての一切の面倒を見てくれる御師という役割を担う館が神宮周辺には多数あった。伊勢滞在時の御師の宿での他藩の農民との交流は、各地の稲の初め交換や農業技術を藩を越えて話し合うことができた。これによって農業の生産量は全国的に拡大したという。

「おかげまいり」は60年を周期として多数の人々がお伊勢まいりに繰り出したことを指している。豊かな者はかりではなく、丁稚奉公などの持たざる者たちも「ぬけまいり」によって伊勢を目指した。「ええじゃないか」は江戸時代末期の慶応3年に東海、関西、四国などで発生したきわめて稀な騒動である。天から御札が降つてくると、これは慶事の始まりだとしてその地域はお祭り騒ぎとなり、「ええじゃないか」の囃子言葉を連呼しながら、町中を練り歩いた。そうなると日常の活動はすべて停止状態となったという。

いろんな解釈がある中で、西垣晴次『お伊勢まいり』の中で「むくり・こくり」が紹介されている。慶長20年（1615）のことである。むくりは蒙古、こくりは高句麗のことで蒙古と高句麗が日本に侵入してきた元寇の役（鎌倉時代1274年、1281年）と関連を持つ。

この戯れ歌の中に異民族が侵入してきた恐ろしい記憶が受け継がれている。人々は歌い踊った。その歌の歌詞に「お伊勢山田の神まつり、むくり・こくりを平らげて／神代、君代の国々の千里の末まで豊にて／老若男女、貴賤、都鄙、栄え栄えうるめでたさよ／…」などと歌われている。これは慶長からさらに340年以上も昔のことを歌っているのである。外敵の襲来の恐ろしさが込められている。外敵とは他藩との戦いではなく、敵は異民族であり、言葉が通じない、残忍な武器を使う、非道な相手であった。幸いにも神風によつて撃退することができたと後世の人々にも信じられている。2回目の襲来に對しては強固な障壁を構築し、外敵の攻撃に万全を期した。その上で日本国中の神仏に祈りを捧げたという。祈り倒したのである。

もう一つの外敵は江戸時代末期の黒船来航である。これは「ええじゃないか」の狂乱の時期と奇妙に一致する。黒船は空砲や号砲、ときに実弾を撃つて圧倒的な破壊力の違いを見せつけてきた。外交的な妥協をせざるを得なかった。大衆は日夜を徹して狂乱踊りで騒ぎ立てるしか恐怖心を鎮めることはできなかったのか。しかしこの見方は違うらしい。踊り狂っている人々は黒船にまったく

関心を示さなかったと聞く。

太平洋戦争敗戦（1945）から、米国の占領軍が日本に上陸してくるまでには半月ほどの間があった。真空時代とも呼ばれているが、その時期は台風シーズンの9月だったので、神風が吹くという噂が拡がったものである。神風なんてあり得ないと、多くの日本人は思っていたけれど、もしやという期待があった。そして期待が実現することはなかったのだが、なぜ神風は吹かないのかと子供心に無念を噛みしめていたものである。

宗教的祈り

祈りってなんやらなあと小国民の頃思っていたことが、その後少しずつ変貌していった。

祈りは単純な行為である。形式的ですらある。それが繰り返されると違った景色が見えるようになり、自分の心を清々しさが支配していることに気づくのである。

私が足を踏み入れたキリスト教のある教会で、牧師さんは事あるたびに「祈りましょう」と声を掛けてきた。神の姿を求めて懸命に祈る姿ほど気高いものはない。この祈りという行為を「反復持続すると不安が消え去ること

に気づく。精神の荒野に道が開けたと言つてもよい。「価値の逆転」を説く人もいる。神仏は信者にその祈りを持続させるために病気に罹患させることすらあるとみるのが価値の逆転である。考えすぎである。

よりうまく、生きる、ことを祈るのではなく、歴史の中で、生かされている、ことに意味があることを知らされるのである。神は雄弁に語りだしたのだろうか。

元号改変について

ところで元号が変わると時代は大きく変わる。これは一つの仮説である。同じ憲法下でという条件が必要である。同じ憲法下という点、最近では昭和から平成への改変しか体験していない。昭和にあつて、日本は15年にわたる大東亜戦争の戦後を新しい国家として立ち直る体験を経なければならなかつた。

昭和天皇は戦後になつて、ただちに人間天皇を宣言された。「私は神ではなく人間である」と。それで日本列島のすべての地域をくまなく巡幸する旅を開始された。昭和21年2月、神奈川県、東京都から始め、9年間に及ぶ慰霊と慰問の巡幸である。戦死者の遺族や引き揚げ者

のように苦勞を重ねた人々と直にお話を交わされたかつたのであろう。私は中学3年のとき、遺族の1人として招待されたので宇治山田市の某小学校の校庭に出掛けて行つた。大勢の人が集まつていた。亡くなった夫の位牌や写真を持参して天皇の方に手向けている婦人がいた。広島、長崎では陛下を恨む人の動きがないか関係者は気を遣つたようだ。ところが、このような悲劇の地でも、天皇は熱狂的な奉迎の群衆に囲まれたと新聞は報じている。昭和天皇はソフト帽を高く掲げて復興繁栄を謳つたのである。昭和天皇は究極の平和主義者に転身されていた。日本全国をくまなく巡幸されるにはかなりの日時を要した。県別では北海道と沖縄は事情があつて別にすると、関東、東海、関西、東北、甲信越、山陽、九州、四国と回り、近畿と来てなぜか三重県が最後であつた。私はその式典に参加した感想文を提出したところ優秀作に選ばれた記憶がある。昭和天皇はこれではほすべて全国を回り終えたとしてお喜びの表情をしておられた。にこやかに遺族との会話をしておられた、というようなことを書いたと覚えている。

平成の御代になつても平和主義はそのまま引き継がれていった。象徴天皇だから、政治的に指令を出すわけ

はない。しかし科学技術の進歩は留まるところを知らない。コンピュータおよび情報通信技術の進歩によって国民の生活が大きく変化した。パソコンやスマホが普及し人の生活の導き役を果たしている。

昭和には名曲が数々生まれたが、平成には記憶に残る名曲はなかったという人もいる。
明記すべきことをあげてみると

1 平均寿命が約6年のびた。

昭和60年 男74・78才 女80・48才

平成27年 男80・79才 女87・05才

(厚生労働省 平成27年簡易生命表より)

2 ネット社会になり人の生活が大きく変化した。

パソコン世帯普及率

昭和64年 11・6%

平成28年 76・7%

インターネット利用者普及率

昭和64年 0%

平成27年 83・0%

(内閣府 消費動向調査)

3 科学技術の進歩 医療、生産、流通が変化した。

ノーベル賞受賞者が増加した。
4 経済のグローバル化が進んだ。

マイナスイ面では巨大な自然災害が日本列島を襲ったことであろうか。4の経済のグローバル化はいいことばかりではなく、貧富の差が拡大する一面があった。

最近のお伊勢まいりは、第62回式年遷宮(平成25年)以降も人々と賑わっている。生涯に1度ではなく、短期日の中で125の宮社めぐりのために何度も訪れる人がいる。おまいりよりも森林浴だという人もいる。パワースポット巡りも人気のアイテムであるらしい。実利的またはスピリチュアルな旅である。

次代の元号になるとどのようなことが起こるのだろうか。突拍子もないことが突然立ち上がるのではなく年号変更以前から少しずつ普及しだしたことが、ある時点から急速に拡大する。次のようなことを想像してみた。

1 人生百年時代へ、生涯設計が変化する。

2 自然言語で指令できるロボットの活用が進む。

3 ゲノム解析編集技術が進歩する。高度な医療、創薬が進歩する。

4 家中心から個人中心時代へ、住まい方の変化がみられる。標準世帯(夫婦と子供2人)が標準ではなく

なる。

5 女性宮家の実現を期に、女性の社会的進出が加速する。

6 フィンテックが普及する。現金を持ち歩かなくなり、キャッシュレス社会となる。

7 日本では人口減少が加速する。

8 環境問題が深刻化する。

象徴天皇制では天皇御みずから施策を実行されるのではないが、それでも時代は大きく変貌を遂げていくだろう。その中であって伊勢神宮は「心のふるさと」として悠久の姿を留めていくことが望まれる。

森本正昭 勢陽掲載作品

電車道の少年 第23号 (平成23年)

墓地のキャッチボール ―ここにいます― あなたのの中に

も― 第24号 (平成24年)

二界御神籤 第25号 (平成25年)

意味ある偶然 第26号 (平成26年)

意味ある偶然(その2) 第27号 (平成27年)

樹より高く昇ろうとした少年 第28号 (平成28年)
新・松山鏡 第29号 (平成29年)

—心のふるさと・伊勢—

離宮院—神宮群行の夢

山 神 徳 子

を経て伊勢湾に注ぐ全長91キロの河川で、宮川堤の桜、神宮奉納の花火大会は有名である。堤下の中島幼稚園の運動会も懐かしい思い出の一つ。

卒園してすぐ、昭和14年（1959）一家は台湾へ移住。そして昭和20年8月終戦を迎え、翌21年春、内地に引揚げて来た。

敗戦当時、日本は列車も不足していて、車中の網のなくなった棚の上にまで人、人。壊れた窓からも人々が入りし、デッキもぎつしり落ちそうにぶら下っている人で溢れていた。

私の生まれは八日市場ヨウカイチバであるが、「生まれも育ちも伊勢の」とは言い難い。

それでも、伊勢神宮、内宮さん、外宮さん、勾玉池マガタマイケ、どんどこ火、エーヤサ、コラセー、伊勢音頭、伊勢えびの言葉に触れると無性に懐かしく、伊勢に生まれた事を誇りに感じている。

伊勢市八日市場町は、東は外宮の神苑、西は宮川を控える位置にある。この宮川は紀伊の山に発し、大台ヶ原

宇治山田駅（現伊勢市駅）の改札口を出ると、一面、空襲で破壊された瓦礫の山、宮後の多くのホテル、旅館はすべて焼失し、外宮さんの通りは半壊の鉄筋や、かろうじて焼け残った僅かな人家が見え、それは外宮の森まで続いていた。

駅裏も昔の面影はなく、丈高くぼうぼうとした焼野原が広がり、その遙か先の河崎、一之木方面イチノキは運よく猛火をまぬかれた人家が残っているのみであった。

鉄道に沿った木柵の下では、戦災孤児であろう子供達
が靴磨きをしていた。その先の道路の両側には、一坪ほどのバラックがずらりと並び、その闇市は、食物や衣類

を買い求める人々で賑わっていた。

一年後は、大人の靴磨きしか見られなくなっていた。ある日、前方に大きなトラックが止まり荷台に捕えられた幼い子の姿が——ああ、浮浪児を孤児院の施設に収容するのだと察した。少しずつ世の中が落ちつきをみせるのは、まだ数年いや10年を要したと思う。

私達家族は、焼け残った間の山の親戚の家を借り、私も宇治山田高女（宇治山田高校）に転入できた。ところが翌22年の夏、父の仕事が決まり、鳥羽、相差に転居、昭和27年4月には度会郡小俣町に移り住み、以来、今に至る66年間、小俣の住民として過している。ちなみにテレビ番組「植木等とのぼせもん」の植木等は、小俣の出身である。

平成17年（2005）11月、小俣町は二見町、御蔭村と共に伊勢市に統合された。小俣町は公共施設も充実し税金も安い住みよい所である。にもかかわらず心底、伊勢市民になれた事に喜びを感じた。いつまでも他所者感覚が抜けない自分から解放され、故郷に戻った感覚があった。その年の年賀状に伊勢市小俣町と表記する嬉しさを父と語り、共に喜びを味わった。

小俣は宮川一つで伊勢と隔てられているが、JR参宮

線の宮川駅を出た列車は鉄橋を渡り、山田上口駅、次はもう伊勢市駅、10分の近さである。土、日は母と伊勢の旧街道の筋交橋辺りの高柳通り、駅前の銀座新道商店街によく出かけたものである。古くから周辺の鳥羽、度会の人々にとつて山田（伊勢）へのお出かけは楽しいイベントであった。高柳の一、六、三、八の夜店は子供連れの近隣の人も多く、活気のある賑わいは夏の風物詩であった。

私が通勤によく利用した宮川駅、裏出口を出てすぐに、小俣の官舎神社の森が広がって見える。毎年の祭りの獅子舞は楽しみの一つ。また、離宮院公園の桜も美しい。この公園の入口には「離宮院址」の碑が建っている。「図説 伊勢、志摩の歴史へ上巻」岡田登氏。「小俣町史」。「郷土史草（伊勢郷土会刊）中東一栄氏」等の資料によると、1200年前の797年8月、小俣に「離宮院」が建てられたとある。隣接する多気郡明和町齋宮とこの事は関係が深い。

齋宮には7世紀末頃から15世紀頃まで、66代続いた「斎王制度」があり、歴代の天皇の即位ごとに、未婚の皇女、王女が京都の天皇に代わって斎王（いつきのみこ）として、伊勢神宮の三節祭（6、12月の月次祭と9月の神嘗

祭)に参宮する習わしがあった。

小俣の大仏山の麓を通って、湯田から宮川駅辺りを数人のお供が、輿に乗った斎王を守って宮川へと行列は進んだのだが、その頃は今の道路と違い大変苦勞の多い道中だった。

小俣は直線距離で斎宮に7キロ、外宮にも7キロと中間点に位置していた為、中継点として離宮院が造られたのである。「度会の離宮」「桜の離宮」とも言われていた。

祭りごとに皇女は小俣に一泊、翌朝、宮川でみそぎ(水を浴び身を清める)を済ませ、二日目は外宮に御奉仕、離宮に戻り、三日目は五十鈴川でみそぎ、内宮で御奉仕、



戻られる仕来りであった。

これは余りにも不便というので、824年からは離宮院が「常斎宮」と定められ、三代の内親王を迎えた。しかし十五年目の839年大火災が発生、広大な敷地内の百余棟が全焼してしまった。その後、再建されたが「常斎宮」としての再興は認められなかった。そして後醍醐天皇の頃、南北朝の争乱によつて斎宮は中絶、自ずと離宮院も絶えてしまったのである。

ところが小俣は離宮院だけでなく、実は壮大な官庁群があり、内院と外院に分かれ、築垣、門、鳥居で区画されていた。御厨は、税の収納、神都行政を行う政庁であり、宿舎は多くの官人、伊勢国司などの諸司の宿舎としても利用されていた。その大神宮の御厨のみは、室町時代まで続いて存在していた。

江戸時代、御巫清直が、現地に残る土塁を実地調査して、離宮院の建物配置を復元。

大正13年(1924)には、官舎周辺の三万五千平方米が「国史跡」に指定された。

昭和54年(1979)小俣町教育委員会の発掘調査で、数棟の掘立柱物跡が検出され、出土品は、小俣町図書館の二階に展示されている。



提供：齋宮歴史博物館

現在は、森の中に数百米に及ぶ土塁が残っていて、文
 化庁に土塁の保存を願っているが、残念な事に未だに
 叶っていない――。

史跡を含む3.8ヘクタールの離宮山一帯は、現在は、
 全て外宮の摂社である官舎神社の所有地であり、五穀豊
 穰ゴコクホウジヨウの守り神を祭っている。

明治になるまで宮川には橋がなく、参宮街道を利用す
 る伊勢参りの旅人は渡し船を利用。後遷宮の時は船橋を
 かけたと記されている。中小俣辺りの若い衆はアルバイ
 トだろうか、二〜四人で肩車をして渡していたとか――。

宮川の渡しワタシの茶屋の「へんば餅」は、伊勢の「赤福」
 同様、名物であるが、私の大好物でもある。

遙か昔、京からはるばる来られた姫君がお輿コシに乗られ、
 たおやかに静々と「齋宮群行」が行われた折りのように、
 神宮と観光の街、伊勢市のイベントとして、齋宮―離宮
 ―神宮へと美しい行列が宮川を渡り、街を練りながら神
 宮へと――その先達の夢を――平成、そして新しい元号
 に生きる若い人にも受け継がれ、いつの日にか一大イベ
 ントの実現が訪れる日を私は夢みている……。



H16.1.1 高橋 章

山神徳子 勢陽掲載作品

子供の頃の思い出 第13号 (平成13年)

幼い日の記憶 台湾の思い出 第14号 (平成14年)

黄色のボトルに夢のせて 第15号 (平成15年)

のどかな日々あの頃 台湾斗六小二〜四年の記憶 第16号 (平成16年)

遥かな懐かしき日々 朴子小四〜六年の思い出 第17号 (平成17年)

敗戦の年 十二歳の私 第18号 (平成18年)

七日間の入院 (高樹陽子) 第19号 (平成19年)

招かれざる帰郷 第20号 (平成20年)

「間の山」の思い出 第21号 (平成21年)

ガラス扉越しの風景 第22号 (平成22年)

九ヶ月の仮住まいの記―鳥羽 第23号 (平成23年)

懐かしい相差 カルチャーショック 第24号 (平成24年)

長岡中学三年の頃を想う 第25号 (平成25年)

高校一年生の思い出 第26号 (平成26年)

悩み多き青春 高二、三年の頃 第27号 (平成27年)

黄色い薔が風に揺れて 三重大の思い出 第28号 (平成28年)

新米教師の第一歩 大内山のあるこれ 第29号 (平成29年)

―心のふるさと・伊勢―

「伊勢神宮」

榊原匡章

伊勢神宮に参拝に行くのはいつが良いのか、元旦に行くのが一番良いのに決まっている。

決まっていると云ったって、きばって云っているわけではないがそーなんだ。でも真夏の昼に参拝はちよつと辛いものだ。

雨降りも傘をさして行くのも辛い。

やはり夜明けの前日が雨で朝晴れになって、朝もやが立って靄が立って砂利道が光輝いているのがいい、暑いときは土埃でいただけなものなのだ。

何百年も前から延々と続いている伊勢神宮の参道の情景。

年の初めは玉砂利に角があつて砂利らしい、半年も経つと丸くなつてきてそこに埃が混ざつてくると靴に埃がついてくるものである。

宇治橋を渡るについて橋の真ん中、左右の真ん中に少し高くなっているのは、

神様が通る道とされている。

新しく宇治橋を架け替えた時はヒノキの匂いがほのかにして気持ちが良いものだ。

トンボが欄干に留っていた、手で触るとほんとにすべすべして気持ちが良いものだ。

左側の初めの擬宝珠には彫刻が彫られている。

冬の朝早いと凍てついて滑る。

太陽が真ん中から上ってくる時がある。

鳥居の処では一礼するのが礼儀である。

鳥居の外は外界、中は聖域になっている。

鳥居の中から入る、外側から入らないのです。

しばらく歩くと右手に手洗い場所がある。

また鳥居をくぐると右に降りる道がある。

降りていけば五十鈴川がある。川幅は百メートルはある。

左から右にゆるやかに流れていくが、のぞいてみるとお金が沈んでいる。鯉

もゆるやかに泳いでいるが、なぜか右の隅の方に鯉がたむろしているのが見える。

左の方を見てみると紅葉がきれいに色づいている。

夏の土用の日に水を汲むと腐らないのは不思議。

—心のふるさと・伊勢—

「豊受神宮」

榊原 匡章

外宮には道祖神が存在する。

内宮にはあまり存在しないのはどうしてか。

内宮が出来てから外宮が出来るまでには五百年の隔りがある。この五百年の間に道祖神を置くようになったのはなぜか。神宮にかかわる書物には何も書いてない。

外宮に存在して内宮に存在しない物は何か、それは道祖神である。

まず第一に方位学から伊勢神宮を書いていくことにす

る。

なぜ北を背に南に向いて建ててあるのか、これは内宮も同じである。

ところで外宮の入口は右と左にある。何も思わずに参拝するのであるが、方位学を学んでいる人、占いをされている人は必ず左から入って参拝に行くのであるが、何も考えない人は右から入って参拝をする。

一般の人はただ車から降りて近い入口から入ると右なのである。

何れにせよ何も考えずに参拝に行くまたはお参りに行くのであるからどちらでもよいのである。ただ近いから近い入口から入ってよいのではないかと思う。

俗にいうだまし絵になっているのだ。

全国に左右に入口があるのは外宮だけではないか。伊勢市駅（旧山田駅）からまっすぐに歩いてくる参道から外宮に入るのは左である。山田駅ができる前は宮川の渡しから来ると右入り口ではなかったか。

左は方位学で言う巽入りなのである。考えて入る、ただほーっとして参拝するのでは駄目なのである。

ご利益に預かろうと思つたら考えないと駄目なのである。

なぜ右と左に入り口があるのかは少し考えればわかることである。

左から入ると橋があつて橋を渡ると左に手洗いがあ
る。これは右から入る場合も橋があるのだが、手洗いは
橋の手前にある。なぜ橋の手前に手洗いがあ
るのか。一方は橋を渡つてから手洗いがあ
るのか、を考えていない人が大半であ
らう。左から入り右から出ると思つてい
るのかも知れないが、それは違
う。方位で言うとき異から入
り乾から出るのならわかるが、異から入
り巽から出るのが正解だと思
う。

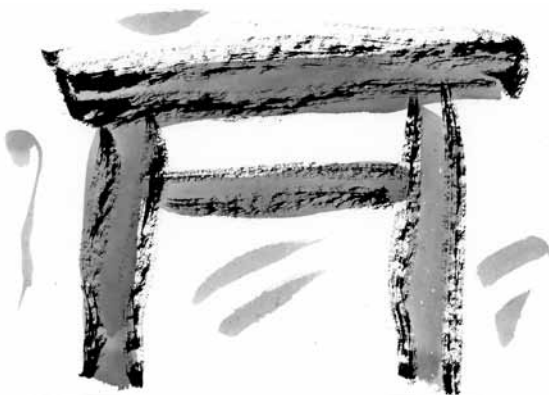
この外宮のように入口から考
えて参拝するということに
気を使う神宮は他にどこ
があるだろうか。存在しな
いと思
う。

入口だけならよいが、いつ
の頃からかは知らないが、
パワースポットなるものが
言われ始めてきたのはど
んな意味があるのかさつぱ
りわからない。

確かに外宮には仕掛けが
存在するのはわかるので
あるが、私が言っている
道祖神とパワースポット
とは意味が違
う。

巽という所には大黒様の
道祖神が設置してある。
南にはそれなりの道祖
神が設置してある。何
か闇雲にこの石

にパワーがありますと言
っている人たちがいるの
はいかがなものかと思
う。



—心のふるさと・伊勢—

「宇治」「山田」「伊勢」

江崎 淑子

私が生きたのは現在の伊勢市神社港かみやしろこうと聞いている。父は昭和十七年に韓国に渡り、全羅南道巨文島灯台の無線方位信号所に勤務、通信技手として働いていたそうだ。巨文島は済州島と韓国本土の間にある小さな島で、いい漁場だったと聞く。

巨文島で新婚生活を送るうち終戦を迎え、風呂敷包ひとつで引き揚げてきた。

終戦の年十一月に引き揚げた父は、母の実家のある現

在の伊勢市にいったん落ち着き、しばらく神鋼電機で働いていた。そのころ神鋼電機の神社寮かみやしろで私が生まれた。神社は勢田川の河口付近にある。生まれたところがどんなところか、戸籍の番地を頼りに訪れてみたが、そこには五十鈴寮という立派な寮が建っていた。建て替え前の寮を見ておけばよかったと思ったがもう遅い。

私が一歳にもならぬとき、東京へ出て就職、その後も父は転職し、海上保安官になって落ち着いた。しかし、転勤が付きまとう職であったので、全国を転々として子供時代を過ごした。今、私は伊勢と深くかかわって暮らしているが、明和町在住である。赤ん坊の時伊勢を出て以来、住居を伊勢市内に置いたことはない。

母は伊勢市本町のあたりで生まれ、子供時代・娘時代を過ごし、結婚するまで伊勢で暮らした。結婚して伊勢を離れたのちも、伊勢の思い出や郷愁がたびたび彼女を襲ったに違いない。祖父が神宮の禰宜職だったのも、伊勢への思いが深かったことにつながっているのかもしれない。

結婚後の赴任地でも母は伊勢言葉が抜けず、「あの関西弁の奥さん」と呼ばれた。東の人たちにとっては、伊勢弁も大阪弁もひとまとめに関西弁である。「あの関西

弁の奥さん」という呼び方の中に、わずかに侮蔑の響きを感じられた。今では方言も個性であると認識され、関西弁も市民権を得ているが、半世紀以上前はそうではなかった。

伊勢をしつかり抱えた母だったと思う。

母はしかし、伊勢という言葉を私と同じ意味では使わない。

「伊勢で生まれた」とは言わず、「山田で生まれた」という。

「伊勢へ買い物に行こ」というと「山田やろ。伊勢ちゅうのはもつと広いところをいうんや」という。昔の伊勢の国の範囲が母の伊勢なのだ。

江戸時代には桑名・菰野・津・亀山・久居などを伊勢の国とした。神宮のある山田は幕府の直轄地とし、山田奉行が置かれた。なるほどこれでは、山田は伊勢ではない。だけど私はもちろん、母も生まれる前のことではないか。

「山田ていうたら、宇治山田と思うやろ」と返すと「宇治山田いうたら、宇治と山田のことや」という。ややこしくしようがない。

かつては内宮鳥居前町を宇治、外宮鳥居前町を山田と

呼んだそう。明治二十一年市制・町村制施行に際して、山田にするか宇治にするか、紛糾の末宇治山田町と決められた。その後明治三十九年に宇治山田市となった。それから何度も名称を巡る問題は議論され、また小さな編入などもあった。

昭和三十年には豊浜村、北浜村、四郷村、城田村を合併し、同時に宇治山田市が伊勢市に改称された。なるほど、伊勢市という名称ができたのは、そんな後のことだったのか。

平成十七年にも大合併があり、二見町、小俣町、御薮村を統合して現在の伊勢市になっている。

「伊勢」と「山田」、そんな母とのやり取りももう思い出になっちゃった。



―心のふるさと・伊勢―

閻魔大王がくれた臍

西村 壽郎

すると奥さんが腹の方はどうだろうかと言ったので、警察が水を持って来てバケツで洗うと臍は無事であった。

奥さんが大きな臍痕にすがりついて泣いた。これは奥さんにしかわからないエピソードであった。

「主人は子供のころ川で溺れて、人工呼吸では駄目だと言われたとき隣の人に助けられたんです」と言った。それは大きなモグサを臍の上に乗せて灸を据えたならば息を吹き返したのだと言う。これがその時の灸の痕であった。

これは七十年前も前の旧制高等商船学校の分校の図書館で読んだ物語である。

伊勢は度会郡度会町に住む私・西村壽郎の不思議な物語である。

東京高等商船学校の月影丸が生徒を乗せて練習航海に船出したときのことである。途中嵐に遭って静岡の海岸に漂着した。船長の遺骸は帆柱にくくられていて他に誰も居ない。これは船長だと証明するには顔はすっかり壊れていて、当時はDNA鑑定もないため判断の仕様がなない。東京にいる奥さんと呼んでもわからなかった。

ところで俺は今二つの臍を持っている。

一つは親から貰った臍、いや親があったという証拠の臍、もう一つは近頃閻魔大王から貰った臍だ。一つ目の親から貰った臍は不様なものだ、何しろ親自身が子に対する愛情も何もないひどい親だった。

臍とは何であるのか。これは親が子に與える生きる素を通すきずなの道である。これがなんとも細い道だった。これがあまり太いと親そのものが弱ってしまつて死んで

しまうと思つて細くしたのだ、それは間違いない。

当時の小学校の通信簿を見よ。要養護と書いてある、それは肝油組と言われていた。栄養不良が故に肝油を強制的に飲まされていたのである。

それにもう少しで大人になる処まで来た時、親が「この馬鹿たれ俺の言うことがわからないのか、馬鹿というのは馬か鹿かを判別できない者のことだ」と言つて、俺の言いたいことは何も聞いてくれなかった。

それで俺は成人してから老年になるまでいつか怒つて狂い死んでやろうと思つていた。

それがどうしても今まで死ねなかった。どうしてかという、それは死ぬ前に閻魔大王に会つてこれまでのことを何故こうなったのかを聞いてみたいと思つていたからだ。

しかし今まで閻魔大王に会うことができなかったのだ。

ところがだ、突然大王に会うことが出来る機会が訪れた。

「俺の今までのやり方はどうでしたか」と聞いたら「そんなものなつたらん」と言った。

そして死界の向こうに行つてしまおうとされたので、

俺は早く連れて行つてくれと言つてしがみついた。するとくるりとこちらを向いて持つていた剣で俺の腹を突いた。

「もつと迷界にいて苦しめ」と言つて忽ち去つて行つてしまった。

気がついたら腹に穴があいていた。これが第二の臍である。

俺の病状だが、何しろ胃瘻をやつてもらう前には、自分で起き上がることも歩いて便所に行くこともできなかったのである。

何故この様なことになったのか。

それは二ヶ月程前のことであつた。健康で毎日仕事をしていたのに、ある朝急に両腕が動かなくなつた。ちよつとも動かすと痛いのである。起き上がることもできなかった。

ようやく老妻に起こしてもらつて、それでも朝食を運んでもらつて寢床で食べた。それからである。みんなの話によれば玉城町、町立病院の整形外科によい医者がいるということ、その医者に診てもらつたため娘の車に乗せてもらつて行くことになった。

「今では少し位は動かせることが出来るようになったんですが、肩から下が動かないんです」と診療医に言う
とまず血液検査をやりましょうということで、この結果
が出る迄に二時間待合室で待った。

その結果はどうもリュウマチらしいです、という診断
であった。

よい薬が出来ましたからこれを飲んで下さいと言われて
たので併立の薬局で処方箋通りの薬を貰うと、薬局長が
これはきつい薬ですから決められた通りに飲んで下さい
と言った。

きつい薬というのはステロイド系のプレドニンという
ホルモン剤であった。きついと言うのはどういうこと
ですか、と言っても何も答えはなかった。すぐに一回分を
飲むと家に帰るまでにすっかり痛みはなくなり、今まで
通りの体になったと感じた。なるほどこれは特効薬だと
思った。

今まで通りの体になったと思ったのは、手足の動かし
方に何も変わった様子はない、それでももう普通の仕事
は無理だと言われたので毎日が退屈で仕方がなかった。
後は二週間毎に診察に来いというので毎日このプレドニ
ンを飲むことになった。

それから二回診察に行つて血液検査をしてもらい、そ
の度にリュウマチを起こす成分が減ってきたということ
で薬の方も減らしてもらった。

しかし二ヶ月経つたときであった。どうも喉がおかし
いので予定の日ではないが診察に行くとすぐに精密検査
をされることになった。喉から食道にかけてのカメラ撮
影の結果は入院せよと言う。二日間の入院の間に声も出
しにくくなり何も飲み込むことが出来なくなってきた。
ここでは駄目だから日赤に行けと言うので、家の車に乗
せてもらつて日赤に入院した。

ところがこの症状はプレドニンというステロイド系の
ホルモンの副作用であるのはわかつているが、どうもそ
の対症療法が決まっていないらしい。声は出なくなり何
も飲み込むことは出来なくなってきた。頭ははつきりし
ているのだが、しまいには口の中と喉が痛くて我慢でき
なくなってきた。

これはヘルペスウイルスのせいだと聞かされた。自分
では後で思い出すことが出来ないのであるが、一日中う
なり通しであったという。

原因は人間の外部の皮膚にこのウイルスがつくと帯状
疱疹となつて非常に痛くなる。これが喉についたのであ

るから無性に痛いのだという。

四日ばかりうなり通しで隣の病室の患者さんにも迷惑をかけたらしい。妻と娘と交代で二十四時間つきっきりの看護を受けた。何も飲み込むことが出来ないので点滴だけが頼りであった。

このウイルスは直接に退治する薬はないらしい、それでいろいろのウガイ薬をとり混ぜて一日何回もウガイをやった。少し良くなってきたと思つたとたんに、喉に痰が詰まる様になってきた。吸い出す痰取り器の操作が悪かつたのかどうか、喉から血がドツと吹き出してきたので看護師も驚いて家に電話したらしい。家中みんなで作ってきた。ちょうど二月の寒い残雪の積もっている日であった。

みんなが来てくれる迄に出血は幸いにも止まっていたので、輸血するまでにはならなくてよかった。しかしそれからからは体力の衰えるのが激しかった。二週間目頃に医師が胃瘻をやるより他ないと言ってきた。

まあ胃瘻をやってもらう程の老人なら死は近いだろう、胃瘻をやるということはもうだめだと思われているのかなと感じたが何でもよい、いいと思うことならばやってみよう、と覚悟を決めて言った。こうしてすぐさ

ま手術に取り掛かったのだが、全身麻酔のため何もわからなくなつたが、手術は一時間位で終わった。

後で考えると閻魔大王に会つたのはこの時であった。

もうこのままでは栄養が取れなくなり死に到るから胃瘻をやろうと胃に穴をあけた。そのとき第二の臍が作られたのである。その後はみるみるうちに体力が回復して全快することが出来た。

これは閻魔大王のお陰であった。再びこの世に戻してもらつた命をどのように使うか思い悩んだ。このまま家に帰つても大丈夫だと思つていたが、近日中に日赤の付属のアフターケアをする虹の園という施設が出来るので、そこに入所して少しの間、養生した方がよいだろうと言われた。それでその係の人がやって来て身体検査をやつてもらふことになった。

中年の別嬪さんの女性がやってきた。

生年月日に始まるありとあらゆる履歴を訊かれた。旧制中学から学徒動員までのところは、世間には同じ経験をしてきた同類がたくさんいるためか、わかつてくれたようだが、俺の話した高等商船学校の分校ということになると理解されるのに手間取つたのであった。

今までに何度もこのことについてはそんな学校があつ

たのかという質問を受けた。それでなるべくこのことについては話さないことに決めてきたのであったが、この時の査問には答えるより外なかった。何しろ今迄の病状からすると最後の方は驚異的回復をしているのに不思議に思ったのかもしれない。それで結論はこのまま家に帰ってもいいでしょう、アフターケア園に入る迄もないですね、ということになった。

これは高等商船学校岡山分校の訓練や学習の有様を詳細に述べたせいであろうか。最後の俺の判断で、体験したことを詳しく話そうと思ったのである。

以上のような病状や入院の事情を経て、俺は奇跡的に体調が回復したのだ。閻魔王のお陰である。そのお礼というべきであろうか、実現したことは「愚直の果て」と題して書いた我が一代記が出来上がったことである。ご興味のある方は以下の文献を御覧いただきたい。

西村壽郎 勢陽掲載作品

愚直の果て（前編） 第27号（平成27年）

愚直の果て（後編） 第28号（平成28年）

戦中派のアーカイブ 第29号（平成29年）

―心のふるさと・伊勢―

伊勢本街道

玉城町の善楽寺

水田 まり

奈良県宇陀市榛原を經由して伊勢神宮へいたる古来よりの参拝道を伊勢本街道という。その伊勢本街道の終着点に近い玉城町に善楽寺はある。正確にいうと伊勢本街道から脇道に自転車です十分程走った曾根という集落の寺である。周囲は伊勢平野が広がり、前方には宮川堤が集落と川を隔てるように真っ直ぐ伸びているのを臨むことが出来る。この宮川は一級河川である。江戸時代お伊勢参りの参宮客はこの宮川を前にして足を止められた。こ

の宮川には明治時代になるまで橋が無かったので渡しは小舟で渡る。伊勢本街道を歩いてきた参宮客は上の渡し（別名柳の渡し）を、伊勢街道（参宮街道）を歩いてきた参宮客は下の渡し（別名桜の渡し）を、そして地元の人が利用した磯の渡しの三ヶ所が宮川の渡し場として利用されていた。いずれもおもてなしのボランティアで無料であった。

善楽寺の近くの渡しは上の渡しと呼ばれ、四月ともなると宮川堤は桜でピンク色に染まる。資料には下の渡しが別名桜の渡しと書かれているが、宮川の堤は上も下も桜の堤で今も昔も変わらない。

江戸時代の参宮客は馬でやってきて宮川を前にして馬を返した。また神宮を前にしてやれやれと一服して餅を食べて馬を返す、すなわちこの餅は「辺馬餅」と呼ばれるようになった。旅人に旅の疲れを癒して体力をつけてもらうために伊勢人は餅でもてなしたので、沢山の名物餅が出現した。ちなみに上げてみると、あるわあるわ。伊勢で生まれ育った私であるが、改めて餅の多さに驚いた。辺馬餅、二軒茶屋餅、赤福餅、岩戸餅、神代餅、くうや餅、太閤出世餅ざっとこんな具合である。一日何万人という参宮客がこの渡しを利用したそうである。今は

立派な橋が架かり、また舗装された堤を沢山の車が走っている。

善楽寺はこの堤にある坂道を降りて数分の集落にある。一七〇五年建立の善楽寺はおよそ三百年続いて今日に至っている。一七〇二年には赤穂浪士の討ち入りがあり、その五年後には富士山の大噴火、享保の改革は一七一六年である。お伊勢参りの「ええじゃないか」の乱舞が起き、全国から伊勢へ伊勢へと人々が押し寄せたのが一八六七年である。善楽寺は宮川の上の渡しから参宮客の賑わいを見ながら、江戸の文化にも接していたのではあるまいか。そんなことを思いながら、善楽寺を訪ねたのは、この地方の田植が終わって早苗が春風にそよそよと靡いている四月の下旬であった。弟が亡くなって十日が経っていた。善楽寺の坊守さんと弟は同級生の間柄で、お寺に咲く藤の花を観賞する会員でもあった。楽しみにしていた藤が咲くのを待たずに逝ってしまった弟の代わりに、姉の私が善楽寺を訪ねたのである。初めて訪ねる善楽寺である。見渡す限りの田圃の中に寺の薨が道に滑り落ちるように広がり春の日に輝いていた。住職さんと坊守さんが笑顔で迎えてくれた。寺の名から、きつとこの寺は善きことをして楽しむ人が集まる寺なのであ

ろうかと、一人勝手に考えた。私は善より楽が気に入った。善きことばかりしている人はいるだろうが、表面はそう見えても心の中まで見ることは出来ない。人間誰でも悪の心も持っているだろうし、そうでないと人間味にかけると思うのだが。

楽は楽をするというより楽しいことをするという意味にとった。毎日の暮らしの中で楽しみは生きるための、またなにかを遣りぬぐうための大事なアクセントだと思ふ。寺の名前からそんなことを考えていると、住職さんと坊守さんは楽しい方なのだと思えて来る。きれいに刈りこまれた庭の奥に歩を進めると藤が見事な花房を万と付けて時折の風にゆれている。ぶんぶんとなにか騒がしいと思ったら、花の蜜を吸いに集まった虻が盛んに羽根を動かしている。藤の花が縁側から一望できるお座敷でお茶とお菓子をご馳走になりながら、弟の死に涙する私に、坊守さんは静かに話してくれた。死ぬことを「往生する」と言いますが、その意味は、死んで彼岸へ行き、そこでまた生きて私たちを待っていてくれるのですよ。弟さんはこの世にはいなくなりましたが、彼岸でしっかりと生きています。私はその話を聞いて心が軽くなった。

そして最後に、弟さんが繋げてくれたご縁を大切にし

ていきましよう。と笑顔で話してくれた。生家と目と鼻の先のお寺でありながら七十歳にして初めて訪ねた善楽寺である。弟と藤の花が繋いでくれたお寺である。住職さんは、坊守さんと私が話している間に蕨を集落のはずれの野で摘んできてあく抜きをして、土産に持たせてくれた。なんとも心優しい住職さんである。住職さんにご母堂と愛犬に見送られて私は坊守さんの運転する車に乗せてもらい寺を後にした。



提供：写真クラブ「たまき」所属 西川勝洋

水田 まり 勢陽掲載作品
 冬の空 第3号（平成3年）
 軍鶏 第4号（平成4年）

二階建ての家 第5号（平成5年）
 花ことば ツイードのコート 第6号（平成6年）
 ピンクのワンピース 第7号（平成7年）
 ジキタリス 第8号（平成8年）
 姉ユリ子 千歳飴 第9号（平成9年）
 沙羅 第10号（平成10年）
 彼岸花の咲く村 第11号（平成11年）
 僕はトーマス（一） 第12号（平成12年）
 僕はトーマス（二） 第13号（平成13年）
 天使の笑顔 第14号（平成14年）
 櫂の下で 第15号（平成15年）
 狐 第16号（平成16年）
 鈴の音 第17号（平成17年）
 茜川 第18号（平成18年）
 千歳飴 九号改訂版 第19号（平成19年）
 休み 第20号（平成20年）
 ピンクの鼻 第21号（平成21年）
 プルシャンブルーの恋 第22号（平成22年）
 ピースの天火 第23号（平成23年）
 雪の伊勢本街道 第24号（平成24年）
 バツ一 第25号（平成25年）

続 バツ 第26号 (平成26年)
僕はトーマス完結編 第27号 (平成27年)
大豆の花 第28号 (平成28年)
短歌 江戸時代4 第29号 (平成29年)